

にしあいつ物語 100 選 夏の特別編

毎月、西会津に伝わる伝説や民話などを紹介している「にしあいつ物語 100 選」。

平成 29 年 5 月号から始まったこのコーナーは、今では 50 話を超えました。

今月号では、夏の特別編と題し、西会津に伝わる怖い昔話を厳選し紹介します。

[参考文献『ふるさとの伝説』]

化け燈籠（化け地蔵）

諏訪神社（野沢）の東に、長泉寺という寺があったと伝えられていますが、いつの時代にあったのか、詳しいことは分かっていません。

その長泉寺があった頃の話です。この寺の入口が越後街道に面していて、そこに六地藏が建っていました。竿石の上に燈籠のような六角の面に六地藏を刻んだ火伏型の石が乗り、一見、燈籠風ですが、昔の地元の人たちからは「化け燈籠（化け地蔵）」として恐れられていたとのこと。それにはこんな話が残っています。

昔、越後国のある大名が参勤交代で江戸に上る折、野沢で一泊した大名行列が威儀正して町外れのこの辺を通りかかりました。そうしたところ、一人の男が急ぎのためか警蹕（大名などが通行する時に人々に声をかけて注意すること）の音が聞こえなかったらしく、そのまま往来を急ぎ足で歩いているのを見咎められしまい、供先を汚したと捕らえられて無礼討ちされてしまいました。

思わぬ出来事に夫を失った妻は、世をはかなみ、間もなく 4 人の子供と共に街道下を流れる大槻川に身投げして、夫の後を追いました。それを哀れんだ里人たちがこの親子の霊を供養して、その手討ちされた場所に六地藏を建立しました。

しかし、この地蔵供養塔が建って間もなく、夜ごとにここを通る旅人は妖怪変化に悩まされ、大いに恐れられました。ある時、一人の屈強な飛脚がここを通りかかった際、突然火の玉小僧が前を塞いで進むことができず、その飛脚はその場で道中差（護身用の脇差）を引き抜き、切りつけたところ、カツンという音とともに火の玉小僧は消え、元の暗闇に戻りました。

翌朝、倒れていた地蔵を見つけた地元の人たちが立て直してみたところ、竿石の肩あたりに太刀傷が残っていました。それからというもの、ぱったりと地蔵の妖怪の出現は止んだといひます。

里人たちは、哀れな親子 6 人の怨霊が六地藏に宿り、旅人たちに通行の害をなしたのだろうと語り合いました。六地藏は、現在も遍照寺（野沢）の入口に建立されています。



遍照時の入口にある六地藏（写真中央）



赤子沼（百戸沼）

台倉山と木地夜鷹山に囲まれたところに百戸沼という沼があります。ある説では、「赤子沼」が本当だとも言われています。この理由は安土桃山時代から江戸時代にかけての慶長年間に、黒沢にあった“鈍子岩鉾山”が全盛時代までさかのぼります。

そもそも黒沢の鉾山が“鈍子岩鉾山”と呼ばれた由来には次のような話があります。

ある日、山菜を取りに行った村の老人が、草間に金襴緞子※のようにピカピカと光る岩を見つけました。これを掘ってみたところ、まさしく金であったことから、こう呼ばれるようになったと言われています。

この金山が会津藩の主導によって大々的に掘り始められると、各地からたくさんの人夫が集まってきて働くようになり、鉾山周辺はたいへん賑わいました。

ところが、多くの人夫を抱え過ぎたため、彼らの住む家が必要になりました。山あいのため土地がないことと、仕事の辛さから人夫が逃げ出すのを防ぐ意味もあって、大滝集落から奥に入ったところの沼がある辺りの平地に、100 戸ほどの小屋を建て、人夫をそこに住ませたのでした。

この人夫小屋には多くの飯炊女が働いていましたが、その中に大滝集落から通っていた娘がいました。美しい娘で、若い人夫たちが言い寄るのですが、娘は一向に相手にすることなく甲斐甲斐しく働いていました。

そのうち、1 人の人夫がある春の夕方、その娘の帰りを待ち伏せて、無理矢理に乱暴しました。その数ヵ月後、不幸にもその男の子を身籠った娘は、月が満ちて赤ん坊を産み落とすと、そのまま意を決して、赤ん坊を抱いたまま百戸沼に身を投げて自ら命を絶ってしまいました。このことが知れ渡ると、娘に乱暴した男の名も広がってしまい、男はいたたまれずに夜に紛れて逃げてしまいました。

そんなことがあった翌年の夏の夕方、その沼から赤子の声が山にこだまして激しく聞こえたといひます。小屋の人夫たちは「沼に沈んだ赤子が泣くのだ」と言って恐れ、それからはその沼を「赤子沼」と呼んだとのこと。



現在の百戸沼

※金襴緞子 … 「金襴（きんらん）」とは、金糸や金箔を用いて柄を織り出した黄金に輝く最高位の織物、「緞子（どんす）」とは、金襴と並ぶ最高位の絹の紋織物を意味します。そのことから金襴緞子とは、「華やかでぜいたくな美しい織物」を意味します。